

私は、この本の四章を読み終えて、医療は、病気やケガを治すものであり、医師は、その技術を使って命を救う仕事をする人達のことであり、命を救えることが本物の医師であるという考え方が大きく変わりました。

私は将来、看護師として、救命救急センターで患者さんの命を救う手伝いをしたいと思っていました。しかし、この本を読んで、これからの進路について、考えようと思う良いきっかけになりました。

この本のこの章では、医療の現実と、これからの医療のあり方について、池田先生と、トインビー博士の考えや、思想を学ぶことができます。

現在、科学技術が著しく発展し、医療の技術力も昔と比べると、かなり向上しました。そのため、医師が、その技術をいつ、どのように使用するかということが、生命を左右するようになりました。医学の力が巨大になっていけばいくほど、医学に携わる者、そして、患者自身の尊厳を奪ってしまっています。

トインビー博士によると、医学は昔、「仁術」であると言われていたそうです。仁術とは、「慈愛のある治療の術」のことを言います。慈愛とは、深い愛という意味です。つまり、医学とは、「患者に対して、深い愛情を持って病気やケガを治す術」であったということです。しかし、今ではその思想が世界的に失われつつあります。

この本の中では、医師と軍人を比べて、医師にとって本当に大切なものとは何なのかということを説明して下さっています。軍人と医師という職業は、片や命を奪ったり、人に害を加える職業であり、もう片方は、命を救い、人に恩恵を施す職業です。まったく違うものにしか見えない二つの職業ですが、類似している点があります。それは、「死への恐怖」「心身の苦痛」です。「命」という大きく重いものを扱う職業には、切り離すことの出来ない感情です。つまり、軍人と医師は、紙一重であるということです。

では、医師が、軍人と違うところは何なのか、それは、時に感情を殺し、時に患者を思う温かい思いやりがあるというところではないでしょうか。

実際に、私の住む地区の、消化器系専門医の方にお話を伺うと、「患者さん一人一人に、それぞれ生活があるように、患者さんに合う治療法も違うから、技術だけじゃなくて、相手の話を良く聞くことも大切だよ。何年やっても同じということがないから日々勉強だよ。」と、仰っていました。

命を救う技量と、患者を思う思いやりを兼ね備えてこそ、本物の医師と言えるのだと思いました。

この本の中で、池田先生は、「医学は、本質的に理性の科学的思考法を必要とするが、それ以上に温かい人間的な心情が要求され、相手の生命を尊いものとする姿勢が必要とされる。」と、仰っています。

この言葉を読んだ時、将来、医療に携わる仕事を目指す一人の人間として、「医師」という職業の難しさを思い知りました。医師、特に外科専門医師は、手術をして病気を完治させることが仕事ですが、そこだけに囚われてしまってはいけません。患者の状態や、これからの生活を考え、患者自身のことを思いやり、考えて行動しなくてはなりません。医師は、冷静な科学者であり、患者の友人でもなくてはいけないのだと感じました。

また、臓器移植手術についても語っています。今でも移植手術というのは、簡単ではない手術ですが、最近のニュース番組などで良く耳にするようになり、これからの世の中で、需要になってくる問題だと思います。

移植手術は、誰かの命を助けることができなかつたということを前提に考えているという点が問題視される原因ではないでしょうか。

この本の中で、池田先生も、トインビー博士も、移植手術には反対だと仰っています。私も最初、「何で!？」と思いました。誰かの命を助けることができなかつたということは、残念なことですが、その死を他の人の生に変えられれば、その人の中で生きることができるのではないかと考えていたからです。もしも、自分に何かあった時には、自分の臓器は誰かのために使ってほしいと思っています。

しかし、読み続けていくうちに、現在、移植に必要な「死の判定」の境界線があやふやな部分があり、その判定に対する解明がされていないということや、移植というものが、人間の尊厳を守れているのか明確になっていないということを初めて知り、池田先生の仰っている、「医学の進むべき道は、あくまで臓器移植ではなく、人工臓器の開発である。」というお考えに納得がいくようになりました。

また、今の日本での最重要問題は、老人介護問題ではないでしょうか。現在、日本は、超少子高齢社会となり、20年後には、3人に1人が、65歳以上になると予想されています。そのため、これからの医療には、さけて通ることのできない問題であると思います。

この問題に対して、池田先生は、「もっと老人を尊敬する社会を作るべきだ。」と、仰っています。私もこの意見に賛成です。

今年で、第二次世界大戦終戦から70年が経ち、戦争を経験された方々は、70歳以上の高齢者となりました。私は、戦争を経験したことも、実際見たこともないので、そういう方々のお話を聞かせて頂けるということは、とてもありがたいことであり、大切にしていかなければいけない存在であると思います。しかし、老人介護は、他の医学に比べると、あまり進んでいないように思います。それは、核家族が増え、若者が、高齢の方と話す機会が

減少したことが原因であると言えるのではないのでしょうか。

実際、私の家の近所にあるリハビリステーションや、老人ホームに行くと、70代の方の介護を、60代の方がしているという不思議な光景を良く目にします。

この問題が、もっと介護というジャンルを真剣に考え、対処していくことが大切であると思います。

今では、年齢を問わず、精神の死というものが増加しています。アルツハイマーや、うつ病などです。このジャンルについても現代医学は、進歩が遅いですが、重要な問題だと私は思います。家族の名前も、自分の名前も忘れ、寝たきりで介護がないと食事もできないような状態でも生きていくほうが幸せなのか、介抱するべきなのか、難しい問題で、全く答えが出ませんでした。この問題に対して、池田先生は、「老人の福祉は、物質的なものでなく、精神面を兼ね備えた人間味のある真の意味での福祉でなければいけない。」と、されています。誰にとっても、社会に貢献しているという実感が、生きる力につながるのではないのでしょうか。

命を前にする仕事というのは、相手にも、自分にもつらい事や、苦しい選択が付いてくるものだと思います。しかし、どんな職業でも言えることは、誰かを助けたい。誰かを笑顔にしたい。という思いやりの心を忘れないということだと思います。

また、私は、『二十一世紀への対話』というこの本は、20世紀を生きてきた方々から、21世紀を生きる若者達へのメッセージではないかと思います。この本に乗っている、全ての問題は、20世紀の時点で問題視されていたということになります。しかし、移植手術問題も、老人介護問題も、全て今でも未解決のままです。これを解決していくのは、私達10代の役目であると思います。一人が現状の危険をどれだけ早く知り、どれだけ早く行動に移せるかが、未来を決めるのではないのでしょうか。どこかの国のどこかの町の小さな家の普通の高校生であったとしても、その一人が動くことで、平和な22世紀を築くための大きな役割を果たすのだと思います。